台湾建築家王大閎における「中国的」という観念

中国住宅に関する言説を通して

TAIWANESE ARCHITECT DA-HONG WANG'S IDEA OF "CHINESE"

Through discourses about Chinese residences

郭 聖 傑*, 木村 智**, 田路 貴浩***

ShengChieh KO, Satoru KIMURA and Takahiro TAJI

Da-Hong Wang is a Taiwanese architect who is the leader of the modern architectural movement in Taiwan. The architectural philosophy of Wang shows an idea which originates from Chinese culture. In the aspect of design, Wang's works also show a strong relationship with Chinese residences, especially Suzhou's residences, which he had experience with. This paper is focusing on the experiences in Chinese residences which can be extracted from Wang's discourses and attempts to realize how these came to be, by understanding the structure of Suzhou's residences' space. Also, this paper will discuss the meaning of Wang's aforementioned experiences and intends to clarify Wang's idea of "Chinese" from the aspect of space.

Keywords : Da-Hong Wang, Taiwanese Modernism, Chinese, Suzhou's residence

王大閎, 台湾モダニズム, 中国的, 蘇州住宅

はじめに

0-1 研究背景と目的

王大閎（1918-）は戦後の台湾近代建築運動の牽引者と評価される^{注1)}。北京で生まれ、幼少期を蘇州で過ごした。1930年よりスイスの国際学校に留学し、1936年にケンブリッジ大学に入学した。第二次世界大戦が始まるとアメリカへ渡り、1941年にハーバード大学へ入学してワルター・グロピウスに師事した。王の同期生にはイオ・ミン・ペイとフィリップ・ジョンソンらがいる。1953年、台北で事務所を設立し、これまでに116を超える作品と計画案を手がけている。「建国南路自邸」（1953、現存せず）のほかに、「虹廬」（1964、台北）、「国父記念館」（1972、台北）の代表作がある。また、特異な発言もあり、台湾におけるモダニズム黎明期の重要人物と位置付けられている。

王が一貫して追求したのは「現代の中国的建築」であり^{注2)}、「中国人の生活を樹立する」^{注3)}ことであった。その作品は「現代の中国風」と評されるように、中国文化が強く意識されている。西洋モダニズムの影響を受けながらも、王にとって「中国的」^{注4)}という観念はきわめて重要視されたのである。

これまで王の建築思想にかんする学術論文は少なく、なかでも「中

国的」という観念については、様式主義の側面から論じた修士論文が若干あるにすぎない^{注5)}。これらの研究は「中国的」な空間の特徴を中国の宮殿建築から抽出し、王の作品と比較考察している。たしかに、王は「中国建築の伝統を意識して設計している」と述べたが、様式から建築を考えていなかったとも明言している。また、「中国建築のなかで、もっとも心に触れたのは住宅である。その他の寺あるいは宮殿はさほどではなかった」と述べ、とくに少年時代を過ごした蘇州住宅に影響を受け、作品はそれに触発されたと語っている^{注6)}。したがって、王の「中国的」建築という観念の形成については、中国住宅との関連を考えなければならない。

一方で、社会学的側面から王を取り上げた既往研究もある。蔣雅君の「現代性の移植、建築の論述と設計の実践-王大閎と中国建築の現代化にかんする論争」は、中国建築の近代化の視点から20世紀の中国建築の経緯を考察したうえで、王の建築作品が有する社会文化的な意義を論じている^{注7)}。しかし、これらの研究では建築家の思考や経験などの内面が重要視されておらず、これが台湾近代建築研究の主潮となっている。これに対して、本稿は王の中国住宅にかんする認識、とくに蘇州住宅の個人的な体験に着目し、王の「中国的」という観念の把握を試みる。こうして建築家の内面に光をあてることにより、台

* 京都大学大学院工学研究科建築学専攻
博士後期課程・修士(工学)

** 京都大学大学院工学研究科建築学専攻
博士後期課程・修士(工学)

*** 京都大学大学院工学研究科建築学専攻
准教授・博士(工学)

Doctoral Course, Grad. Stud., Graduate School of Engineering, Kyoto University, M. Eng.

Doctoral Course, Grad. Stud., Graduate School of Engineering, Kyoto University, M. Eng.

Assoc. Prof, Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.

湾におけるモダニズム受容の一つの過程を明らかにする。

0-2 研究方法

筆者は前稿で王の言説のみに着目し、その内容を整理分類した^{注8)}。その結果、王の建築思想の中心に「中国的」という観念があり、近代建築による「中国建築の再定義」を課題としていたことが把握された。中国で建築教育を受けなかった王にとって、幼少期の空間経験は中国建築にたいする認識を形成するうえでの大きな要因となったものと思われる。そこで、本稿では王みずからが体験した「中国的」空間をさぐり、言説に照らし合わせながら王の「中国的」という観念の内実に迫ることにする。まず1章で、「中国的」建築にかんするグロピウスとのやり取りを概観し、つぎに、王の公表された言説から、「中国的」建築に言及した言説を收拾する。2章では、蘇州住宅にかんする文献や先行研究を参照しながら、王が幼少期の体験として語る蘇州住宅を推論する。最後に3章では、1章で收拾した「中国的」建築にかんする王の言説と推論された蘇州住宅を照合し、王が語った中国建築の特徴を捉え、グロピウスの認識と比較しながら王の「中国的」という観念を明らかにする。

1章 「中国的」という観念

1-1 時代背景と王における語義

中国人であった王にとって、「中国的」という観念は多義的であった。蘇州での少年時代に中華民国が誕生したが、清王朝時代のような封建的な社会が続き、民主主義はまだ萌芽の状態だった。王は13歳から欧米へ渡ると、中国との連絡はとだえ、教育も欧米で受けた。当時の王は新聞などから祖国の情報を取り入れていたようである^{注9)}。1947年、上海に帰国したが、まもなく国共内戦によって再び中国から離れた。しばらく香港で暮らしたが、国民党政府の司法院長であった父の要求に応じ、1952年に中華民国の台湾へ渡った。

王が60年代に台湾で「中国的」建築を提唱したことは国民党政府の文化政策と深く関わっていたとも見なしうが、むしろ自身の文化的母胎に執心していたとも考えられる^{注10)}。海外移住あるいは中国の政権と国土の変容のなかで、王は政治的イデオロギーとしてではなく、文化的アイデンティティとして「中国的」という観念を形成していったのだろう。「中国的」という表現は容易に中華人民共和国という国家を意味してしまうが、王は「私は大陸（中国）に生まれ、13歳まで暮らしたが、（中略）大陸のことがまったく分からない」と語っているように、王の「中国的」という言葉は地理的、国家的な概念ではなく、中国文化に基づいた生活意識あるいは価値観を意味していたと考えられる^{注11)}。

1-2 グロピウスとの交流

1961年にグロピウスへ宛てた英文の手紙のなかに「中国的」建築について、吟味すべき内容がある。それには「ここには私の自邸の数枚の写真があります。この家は十数年前に完成しました。この建物が中国的（Chinese）に見えることに成功していると期待しています」と書かれている^{注12)}。王は完成した「建国南路自邸」が「中国的」に見えるかをグロピウスに尋ねているのである。しかし彼の意図は不自然である。なぜなら、王はモダニズム建築の巨匠の一人であるグロピウスに自邸が近代建築としてどうかを尋ねるのではなく、中国的かどうかを尋ねているからである。

この質問の前提として、王とグロピウスのあいだには「中国的」建築にかんするある共通認識があったと考えられる。もしグロピウスがそうした認識をまったく持っていなかったならこうした質問が発せられることはなかっただろう。言い換えると、グロピウスが「中国的」ということについてなんらかの認識をもっていたから、王は恩師に意見を求めたに違いない。私文書も含めて調査したところでは、これは王が初めて「中国的」という語を使った事例である。残念ながらグロピウスの返答は見つかっていないが、遡ると、二人のあいだには華東大学計画案(1948)という接点があった^{注13)}。

この計画案について、王はつぎのように述べている。「ある日、グロピウスは僕とペイと討論したいことがあるため、僕らを呼び出した。アメリカ・キリスト教教育基金会は中国東部で華東大学を創建するため、彼に依頼に来たのである。（中略）グロピウスは、僕らのような中国人留学生に中国建築の精神（チョングクオジェンチュディジンシェン 中国建築的精神）を提示することを要求し、参考にしたいと語った」^{注14)}。これは王がハーバード大学を卒業し、中国に帰国するまでのことだろう。王は計画の最初期だけ参与したが、この計画案は初期の王が「中国的」建築をどのように理解していたかを推察するうえで重要な手掛かりとなる。

華東大学案（図1）において、グロピウスは中国のランドスケープと中国の生活方法を尊重しようとしていた。グロピウスは「建物の高さを抑える」とこと、「重量感を持つ傾斜屋根」を中国建築の精神（spirit of Chinese architecture）としている。このような認識にしたがって、次の点に留意して設計されたことが説明されている。1）分散的配置、2）建物の適切なボリューム、3）低く抑えられた建物の高さ、4）傾斜屋根を使うが伝統様式を用いないことである^{注15)}。しかしながら、この計画の最大の特徴は中庭を囲んで片流れ屋根の棟が廊で連結される構成にあるだろう（図2）。透視図（図3）は、建物群が中庭（courtyard）を囲み、屋根がかけられた開放的な廊下（covered, open walks）によって連結されていることを表現しようとしている^{注16)}。

「中国人は歩くことを好む」というグロピウスの見解が反映された結果と言える。

図1 華東大学計画案 鳥瞰図

図2 華東大学計画案 配置図(部分)

図3 華東大学案 透視図

また、I. M. ペイの卒業設計である上海美術館案（1947）に寄せたコメントのなかで、グロピウスは「むき出しの中国的な壁（bare Chinese wall）」と「個別の小さな中庭（small individual garden patio）」を中国建築の永遠の特徴としている^{注17)}。このようにグロピウスは、高さを抑えた建物、重厚な傾斜屋根、歩くための廊、むき出しの壁、そして小さな中庭を中国的なものとして捉えていた。華東大学計画作成の初期に参加した王の認識は、これと共通していたのだろうか。

1-3 王の言説の把握

次に王の言説を辿ってみよう。中国にかんする発言は後期の発言に散見される^{注18)}。ただし中国的建築を主題とした著述は存在せず、会談記録に見られるだけである。なかでも二つの会談が注目される。一つは1977年の「王大閔の家」で^{注19)}、これは1975年に竣工した自邸「虹廬」について雑誌の取材に応じたものである。会談には作品にかんする内容はほとんどなく、王の中国での経験および中国建築に対する見解が表明されている。もう一つは1997年に行われた「東海大学王大閔シンポジウム」における記録で^{注20)}、参加者の質問に応じて「中国的」という観念について発言をしている。

まず「王大閔の家」を見てみよう。中国の近代建築およびその発展について、王は次のように答えている。

言説1：僕の小学校は蘇州にあった。蘇州はひじょうに中国的な都市であり、僕は深い印象を持ち憧れもあった。当時国内で「中国建築（中国建築）」といわれる建物を発案したのはCherry Hassというカナダ人であった。彼は北京協和病院の設計者であり、西洋建築に中国式の屋根を載せた。しかしそれは良くない例だと言える^{注21)}。

王は中国の近代建築について、たんに建築的象徴を用いることを批判している。むしろ中国建築の特徴について、以下のように述べている。

言説2：彼ら（筆者：西洋人）は庭園（花園）の中央に建物を置いたが、中国建築では建物は庭園と交錯しており、廊（走廊）がひじょうに特徴的である。半分は開放的、他の半分が閉鎖的である。二つの連結を通じ、建物と庭園が融合される。これは中国の哲学であり、空間の連続の問題である^{注22)}。

王は建物と庭園との密接な関係を中国建築の特徴としている。とくに「廊」が建物と庭園を密接につなぐ鍵と語られている。そこで、自然との密接なつながりが中国建築の特質かという質問に対し、王は次のように述べている。

言説3：今の西洋もこの特質を重視している。つまり、室内と室外が一体になることである^{注23)}。

様式の観点から中国建築が制作に及ぼした影響については、王は正面から答えなかった。その代わりに彼は壁の役割に言及している。

言説4：中国建築の特徴としては神秘感が重要である。中国建築および庭園（庭園）の設計は内壁（内造牆）と外壁（外造牆）を利用すると、すべてが一目瞭然ではなくなる。進から次の進へ。例えば、蘇州の建物は二階分の壁がある。それは防犯、防火の効果がある一方、優れた秘密性も保つ^{注24)}。

王は壁の配置あるいは「進」という空間ユニットの反復によって、中国住宅が神秘的になっていることを指摘している。

次に「東海大学王大閔シンポジウム」を見てみよう。ここで王は最初から中国建築における建物と庭園の関係に着目している。

言説5：住宅を例としよう。中国建築の中には、数多くの庭園（庭園）があり、廊（走廊）があり、柱もある。これらはすべて混在している。一方、西洋住宅においては、建物はたんに建物であり、その周りが庭園（花園）である。大きい建物には広い庭園があり、小さい建物には狭いものがある。住宅は集中してる。私にとって、これはもっとも顕著な差異である。

中国建築において建物と庭園の密接な関係と、庭園と廊や柱の混在関係が語られている。西洋建築に見られる建物と庭園との疎遠な関係と比較しながら、中国建築における建物と庭園の相互関係が指摘されている。さらに全体配置について、次のように述べる。

言説6：中国建築は大自然に密接する以外、ある種の単純さとシンプルさ（簡単）が建築のなかに存在する。平面にも立面にもひじょうにシンプルさがある。それは一つに大きな構成であり、各建物はかならず独立的である。そして、廊（走廊）あるいは比較的広い中庭（院子）によって連結される。そうすると、一つの広い広場（廣場）、あるいはさらに一つの大きな建築のようになる。大体このような方法である。例えば、陽明山にある中山楼は多種類の建物の形態をすべて組み合わせる。それは外国人の方法である。

廊と院子の建物を連結する役割が示され、その反例として中山楼という作品が挙げられている^{注25)}。1960年代の中国宮殿式建築の代表的作品とされる中山楼は、中心建物である歇山頂、主

図4 中山楼

入口となる攢尖頂、四層の懸山頂が重なり合い、一棟の建物を形成している（図4）。王はこれを西洋建築と捉える。なぜなら廊による連結ではなく、各棟が重なり合うことで一つの建物を形成しているからである。廊による各建物の関連性と、それらと開放空間との関係がむしろ王の関心であり、中国的建築の特質とされている。

王の関心はさらに配置の側面から空間の雰囲気へと移っている。言説7：子供時代の記憶によれば、周知のような中国の建物へ入るとすぐ中庭（天井）がある。その隅にまた他の小さい中庭がある。このような中庭は長い廊（走道）によって連結されている。そこは夜になるとひじょうに怖い。神秘的（神秘）だがひじょうに怖さを感じた。あちらに行くと、早めに自分の部屋へ帰ってきてしまう。当時はその雰囲気にまったく共感できなかったが、今になってこのような雰囲気が西洋建物のなかにないことが分かった。

言説8：中国の建物は、庭（庭院）、廊（走廊）、そして建物がすべて連結される。蘇州へ行った人々は大体この状況を知っている。もし蘇州へ行くならば、できるかぎり個人住宅に行つてほしい。庭園（花園）ではなく住宅である。その中には広い庭園はない。その中は中庭（天井）、または中庭、そして最後に後庭（後院）がある。後庭はひじょうに浪漫的な（浪漫）場所である。坊ちゃんたちと若い侍女たちとの遊び場所である。ひじょうに神秘的であり浪漫的である。

これらの言説によれば、王は天井に関心を払っており、天井と廊によって形成された一連の空間経験から深い印象を得ている。この空間経験を王は「神秘的」と呼び、住宅の最後にある後院を「浪漫的」と形容した。このように王は廊や天井を特別視し、建物と庭園における相互的な関係に着目している。

中国的建築にかんして系統的な認識あるいは経験を述べる論考は上述のほかにはないが、散見される他の記述にも着目すべきだろう。王は代表作の「虹廬」について尋ねられた時、次のように答えている。

言説9：(筆者：虹廬の)高い壁は蘇州の ^{グアウファンチャン} 高 紡 牆 から触発された。一面の壁によって、外部の騒ぎから切り離される。十二歳の頃、夜中に小道を歩くと少なからず恐怖を感じた。あの壁の後に何かあるかまったく分からなかったからである。透かし細工の門はもっと面白い。家にいる者は「誰」と聞いたら、「私」と返事が聞こえる。こうして誰がいるかすぐ分かる。これは伝統的な行為と現代の手法との融合である^{注26)}。

「虹廬」では、「中国的」建築の特徴として壁がとり上げられ、それを自分の作品に利用したことが示されている。

また、次のような発言も挙げられる。

言説10：中国の配置では ^{ジン}進からまた次の ^{ジェン}進があり、^{チャン}間を通して次の間へ進むことは人間の神秘感を満足させる。中国の壁(牆)も非常に機能的である。例えば、住宅を外部より孤立させることによって、住宅のなかにある含蓄という特質が増進される^{注27)}。

王は壁による内部空間の独立性に関心を示しており、進が空間の神秘感を誘発する要因と述べている。

以上を内容ごとに分別してみよう。言説7、8、9は蘇州住宅にかんする内容であり、言説2、3、5は中国住宅にかんする一般的な見解である。言説4と10は両者に関係している。また、言説6は「院子」という用語から中国北部の四合院にかんするものであろう。これらのなかで幼少期の蘇州住宅の体験にかんする言説7、8、9は、王の「中国的」建築という観念を考えるうえでとくに重要であろう。

2章 幼少期の蘇州住宅

2-1 蘇州住宅の類型と王の住まい

ここでは蘇州住宅にかんする言説にもとづき、王が暮らした蘇州住宅の類型を推論してみることとする。蘇州は運河都市として知られており、水路と街路の間に挟まれた「前街後河」の住宅、あるいは河を跨いで建てられる跨水住宅が代表的と言われる^{注28)}。また規模によって大宅、中宅と小宅に分類される(図5)^{注29)}。運河の周辺にはおもに小宅が集中するのに対し、中宅と大宅はおもに水路から離れた路地に見られる。小宅は地割に応じた建設されるため統一性がなく、1堂2廂あるいは4廂の住棟の周囲に壁をめぐらせた形式が代表的である

図5 蘇州住宅規模分類図

^{注30)}。一方、中宅と大宅の平面は整然としていて、基本的には合院というユニットによって構成されている。また、大型庭園(園林)を備えるものが大宅と言われている。

あらためて王の言説を見てみると、王は蘇州住宅についていくつかの周知の特徴に触れていないことが分かる。すなわち、運河あるいは大型庭園に一切言及していない。その一方で、言説8のように天井が強調されている。おそらく王の幼少期の住まいは、大型庭園を備えた大宅ではなかったのだろう。また、運河にたいする言及がない代わりに路地について語られている。そのうえ複数の天井の構成が描写されている。こうしたことから、王が描写する住宅は中宅だと推論できる。王の家柄は革命運動を支持していた政治家であったことから、その住まいは店舗としても使われた小宅ではなかっただろう^{注31)}。一方で、大型園林付き大宅はおおむね封建時代の官僚あるいは富商階級の住宅であったため、大宅の可能性も低いだろう。

2-2 蘇州住宅の構成

中宅の一つの典型例として「修仙巷張宅」が挙げられる(図6)。本節では『营造法原』などの文献を参照しながら「修仙巷張宅」をもとに中宅の基本構成を確認する^{注32)}。『营造法原』は蘇州建築の造営に関係する建築書といわれ、著者の姚承祖は代々蘇州を拠点とした建築工匠の家系の人物である。また、「南方の中国建築における唯一の宝典である」と評価され、蘇州住宅を理解するための代表的な文献である^{注33)}。

1) 居宅

^{ジン}進：蘇州住宅は「進」と「落」で構成される。「進」は基本ユニットであり、一つの合院が一つの進と言える。いわゆる一つの中庭を四つの棟が取り囲む四合院が一つの進である^{注34)}。蘇州の住宅では中庭は天井と呼ばれ、進は庁と天井により構成される^{注35)}。『营造法原』によれば天井は正房の前に設けられるだけではなく、正房の後にも設置される^{注36)}。

進は周囲を壁で囲まれる。それらは位置によって異なる呼称が与えられている。庁の両側の壁は「山牆」であり、屋根の勾配に沿って造られる。構法によって形態は違うが、外側から屋根が隠れるように構成される。山牆から垂直に延長され天井を囲むのは「塞口牆」と呼ばれ、庁の正面に面する中央の部分に「牆門」という入口が設置される。このように進は閉鎖的に構成される。また、敷地全体の

図6 修仙巷張宅 1階平面図

境界線を示す壁は「^{ジェイチャン}界 牆」と呼ばれる^{注37)}。

落：落とは複数の進が一行に配置された全体である。敷地によっては1落のなかの進の数が制限される。奥行方向に進を増やすことができない場合、一般的にその隣にさらに一つの落を配置する。この場合、^{ジュロウ}主落と^{ビエンロウ}辺落に区別され空間的階級性が与えられる。

『营造法原』によれば、主落は入口から「^{メンディ}門 第」-「^{チャティン}茶 庁」-「^{ダァーティン}大 庁」-「^{ロティン}楼 庁」という棟が配列される^{注38)}。門第は住宅の内部と外部をつなぐ空間であり、門第の様式から家主の身分も判断できる。茶庁は輿を置くなど訪問者が主人を待つ場所である。大庁は住宅の中心であり、奥行がもっとも深い。大庁は冠婚葬祭や接客の場所であり、儀礼のための空間である。これら三つの建物は公的空間と言える。主落の最奥には楼庁がある。楼庁は二階建ての建物であり、家主とその家族の日常生活空間に供される^{注39)}。

辺落の配置は主落に対して比較的に自由であり、日常生活空間として使用される。庭園に面する「花庁」と書斎である「書庁」が家主の生活空間であり、女性の生活空間である「内庁」や使用人の部屋などが設置される。このように、日常生活空間は主落の後半部と辺落に設けられるのが原則である。蘇州住宅は機能によって空間が配列され、身分によって活動の領域が分別されている。家主あるいは男性は自由に行き来できるのに対し、女性と子供は後半部の楼庁あるいは辺落を主要な活動の場とする^{注40)}。

庁：進を構成する母屋はおもに庁と呼ばれる^{注41)}。『营造法原』によれば、扁作庁、貢式庁、鴛鴦庁など構法によって多様な種類が挙げられる。前述の大庁などは構成上の名称であるが、ここで挙げられた名称は構法による。四方を柱で囲まれる中心的領域が「^{スエン}内四界」である(図7)^{注42)}。また多くの場合、庁の間口は3間で、中央の間は「^{スエン}正 間」、両側は「^{ツジエン}次 間」と呼ばれている(図8)。正間のなかで内四界の前後には「^{シエン}軒」を設けることが特徴で、格子のような建具をつけ、室内と室外の折衝の空間となる^{注43)}。また、庁の出入口として軒の正間に長窓をつけることが一般である(図9)。軒は奥行方向に対して、横方向の動線ともなる。

天井：中国北方では中庭を院子と呼ぶのに対し、天井は江南の用語である。北京の四合院を代表とする北方の住宅では、四棟の建物が廊によって連結され、その中央に広場のような中庭が形成される(図10)^{注44)}。院子は建物より広いのが一般的である。それに対し、蘇州住宅

の場合には「(筆者：前方の)天井は屋の奥行と同じにする。後方には半分にするあるいは界牆までに至る」といった原則が記述されている^{注45)}。多くの場合、茶庁と大庁の後方の天井は奥行の1/2に満たず、中央に「^{ツウタン}川 堂」という廊下を加え塞口牆に連結する。これによって天井は左右にわけられている。

天井は庭として使われる場合もある。それが「^{ヨウ}園」である。園はおもに辺落の花庁あるいは書庁の前にあり、「花と樹を植え、山を積み上げ、池を掘る」とされる^{注46)}。住宅内部の自然であり、日常生活に近接している^{注47)}。ただし園は天井を変化させたものであり、そのなかに廊や建物を設けることはまれである。

備弄：蘇州住宅には縦長の平面構成に必要な「^{ペイナン}備弄」という特徴的な廊下空間がある。備弄は住宅の側面、山牆に沿って、両落の間に設置されるのが一般的である。主落の中軸線上にある儀礼のための通路に対し、備弄は生活動線であり、女性・子ども・使用人の通路である。備弄と各進を繋ぐために門が山牆に点々と設けられ、おもに軒につながられる。また、採光のために小さな天井や窓を開ける場合もある。

2) 園林

上述のとおり、王の幼少期の住まいは中宅だったと考えられるが、彼はしばしば庭園と建物との関係に言及している。そこで、大宅における園林の構成についても見ておくことにする。

園林：園林の広さは敷地の条件によるが、主要な居宅部分の側方あるいは後方に設置される。園林はたんなる観賞のためだけではなく、居宅を守る機能もある。また、池や石などを設置して景色を造る部分と、建物とともに生活空間として使われる部分がある。園林にある庁には、内四界の前後に廊下をもつ「鴛鴦」や「回頂」などの様式が用いられる(図11、図12)。この他、景色を眺めるための「亭」や四面に窓を開ける二階建ての「閣」などが園林内に建てられる。しかし、これらの配置や種類は居宅部分とは異なり制限されることはなく、むしろ景色の構成にしたがう^{注48)}。また、「園門」という出入口が設置され、居宅から独立する領域ともなっている。

廊：廊は屋根が架けられた細長い建物であり、通行のために供される^{注49)}。その機能は建物を連結することだが、諸建物をそれぞれに分別することとも言える^{注50)}。蘇州住宅では、廊はおもに園林のなかに配置されるが、居宅の部分の門第と茶庁の間に設置されることもある。この場合、廊と庁との連結は直接的ではなく軒が介される。また園林

図7 内四界

図8 庁の例 平面図

図9 長窓

図10 四合院

図11 鴛鴦の例 平面図

図12 回頂の例 平面図

の場合、廊はたんなる点在する建物を連結するだけではなく、見せたい景色をつなげる機能が与えられ、園林における案内路となる。廊は曲折することで園林の空間を区分し、景色の深みを増す効果をもっている。

3章 「中国的」という観念

3-1 言説の考察

前章では王が体験したと考えられる蘇州住宅の構成を確認したが、本章ではこの知見にもとづき、ふたたび王の言説に立ち返って「中国的」という観念の内実を探索する。

まずは王の中国住宅にかんする一般的な見解である言説2、3、5および6を見てみよう。言説2で、王は「建物は花園と交錯する」と述べていた。ここでの「花園」は大宅の園林と理解することもできるだろう。また、描写されている廊の特徴はまさに前章で確認したとおりである。廊は園林の地勢あるいは景色を創造する意図によって湾曲し、園林に多様な領域が造られる。このような廊を渡る過程において、点在する庁や亭などと園林の自然の景色が重なり、王が描写したように建物と花園は交錯する。言説2の最後には「二つの連結を通し、建物と花園が融合される」とも語られていた。連結する廊を通じて両建物のあいだを移動すると、室内と室外の転換が生じ、建物と花園は融合する。王はこれを「空間の連続」と捉え、それを「中国の哲学」と述べている点が興味深い。しかし、このさらなる吟味は別稿にゆずることにしよう。

これに類似して、言説3では「室内と室外が一体になる」と述べられている。これは前述のように、園林にある庁や亭などの建物と廊の関係により、室内と室外が一体になると解される。しかし、これとは別に庁と天井の関係を述べたものと解することもできる。庁の前後に軒に設置される建具は格子状であるため、庁の室内と室外が透けて通じる(図9)。とくに中央の正間の長窓は全開すると庁の内部と天井が一つの連続的空間になる。

言説5では、住宅と庭園の関係が西洋と中国の両側面から述べられている。王によれば、西洋住宅は建物と庭園がそれぞれ独立的である。留学したイギリスの庭園が王の念頭にあったのかもしれない。西洋庭園には建物とのあいだにある種の境界的なものがある。それに対し、中国庭園は「庭園、廊下と柱が混在している」と述べられている。この「庭園」とは園林あるいは囿と考えられる。辺落の各庁は日常生活の空間として天井を囿として利用することが多い。さらに庁の作法を見ると、主に辺落で使われる「回頂」や「鴛鴦」などの様式では、外側から二番目の柱に建具を付けるため、庁の前後に開放廊下のような空間が生まれる。これは「庭園、廊下と柱が混在している」という王の描写に近いだろう。園林の場合は既述したように、屈曲する廊によって廊と廊の柱は園林と混在することになるだろう。

言説6は院子にかんする描写である。「廊下あるいは広い院子によって、全体が広場あるいは一つの大きな建築になる」。すでに見たとおり、院子は中国北部の四合院である。王はここで中国住宅一般を論じるために、天井でなく院子という語を使っている。四合院では独立する建物が院子を囲み、廊下で連結され、一つの全体を成している(図10)。王はこうした構成を、形態を重ねて全体を構成する西洋の複雑な方法と対照させ、「シンプル」と評価して中国建築の特徴としている点にはとくに留意すべきであろう。

次に王の幼少期の蘇州住宅にかんする言説7、8、9を見てみよう。言説7で、王は「建物へ入るとすぐ天井がある。その隅にまた他の小さい天井がある」と述べていた。ここでの「小さい天井」とは茶庁の後方にある天井であろう。重層する大小の天井は幼少期の王の記憶に深く刻まれている。また、王は天井をつなぐ「長い廊下」の記憶についても述べている。この「長い廊下」とは備弄のことであろう。備弄は縦長方向の動線であり、各天井を連結する。備弄の広さは一人ないし一つの輿が通れる程度であり^{註51)}、その両側の壁は二層程度の高さをもつ。さらに屋根が掛けられるため、内部空間は細長く薄暗い。王は落の最奥にある自分の部屋へ帰る際、かならずここを通過しただろう。その恐ろしくも神秘的な雰囲気は王は思い出している。

言説8では、王は「庭院、廊下と建物がすべて連結される」と語っている。ここでの「庭院」は囿であろう。それは広い園林とは異なり、壁により囲まれた空間である。さらに、王は後院についても取り上げている。後院は住宅の最尾にある天井であり、庭園化されて囿となっていたのかもしれない。この後院は辺落にあったと思われる。主落の最奥にある楼庁は家主と年上の家族の生活空間であるのに対し、辺落は家族の若い成員や使用人の空間である。王は後院を「坊ちゃんたちと侍女たちとの遊び場所」と述べた。家主の生活の場から離れ、緊張を緩められる場所だったのだろう。

王が描写した後院の情景は『紅樓夢』を容易に連想させる。主人公の賈宝玉と侍女たちとの物語はおもに住宅の後半部、いわゆる内庁、楼庁あるいは園林などの生活空間を舞台として展開されている。その内容は人間の多様な感情に関わり、とくに賈宝玉と林黛玉との愛情が主軸となっている。王は『紅樓夢』を読まなければ中国人になれないと語ったことがあり^{註52)}、後院を『紅樓夢』と関連させて神秘的かつ浪漫的と意味づけていたのかもしれない。

言説9は蘇州住宅の界牆についての内容である。既述したように、中国住宅は多くの壁により囲まれ、外部からは内部のことが把握できない。そのため、子供の王にとって、夜中の町中はさらに深く暗く感じられただろう。

以上、蘇州住宅にかんする三つの言説は天井、備弄、囿、後院、そして界牆に焦点を当てていた。

最後に蘇州住宅を含めて中国住宅全般に共通する言説を見てみよう。言説4と10の二つはともに壁についてのものである。言説4では、王は「内造牆」と「外造牆」によって視線が遮断されると述べている。居宅の場合、内造牆は進と進のあいだにある塞口牆のことを指している。外造牆は山牆のことであり、あるいは敷地の境界線を示す界牆でもある。また、王が述べた「二階分の壁」は楼庁のあたりに見られる。これらの壁によって、外部からの視線を遮るだけでなく、内部も輿に向かって「一目瞭然」にすべてを見通すことはできない。また園林においても壁が使われ、空間が区画され、植栽の背景が形成されて景色に変化が与えられる。こうした空間構成が醸し出す神秘感を王は捉えており、それを中国建築の特徴としているのである。

言説10は「進から次の進へ」という体験に言及している。この体験は各進の間の塞口牆によって顕著になる。また、「間を通して次の間へ」という描写は庁の内部空間にかんするものと考えられる。いわゆる明間と次間のことであろう。茶庁や大庁では一般に内部空間は区画されないが、楼庁などの日常生活を行う空間では正間と次間は異なる用途に供される。そのため、その境界には格子や屏風などが設置さ

れるのだが、このように空間を分割する壁は「機能的」であるだけでなく、「人間の神秘感を満足させる」。

以上を考え合わせると、王は中国建築の異なる二つの構成に言及していたことが分かる。中国建築一般について述べた言説2、3、5、6では、廊や中庭が独立建物を連結する開放的な構成について語られ、そうした構成が生み出す建物と園林の交錯、「内部と外部の融合」、「空間の連続性」などが中国建築の特徴とされている。これらは王の個人的な空間体験としてというよりも、むしろ一般的な認識として語られている。

一方、蘇州住宅にかんする言説7、8、9は壁で囲まれた閉鎖的な空間構成にかんするもので、幼少期の体験にもとづく個人的な印象が語られている。重ねられる進の空間的な奥深さに神秘性が感じとられ、その最奥にある後院の内奥的な場所は「浪漫的」と形容されている。また、天井を連結する薄暗くて細長い備弄からは、その閉鎖性に神秘性そして恐怖の印象を受けている。界牆によって囲まれた蘇州住宅の夜の外観の印象も、同じく恐怖を感じさせるものであった。

13歳から蘇州を離れた王が主落の大庁などの儀礼空間を経験する機会は少なかっただろう。王の言説に主落のフォーマルな空間にかんする発言がなく、日常の生活空間についてのみ語られているのはそのためかもしれない。そこでの「一目瞭然」できない閉鎖性や奥深さが、王に神秘的、恐怖的、浪漫的な空間体験をもたらし、強く王の記憶に刻まれたのである。王はこうした特質を「中国的」と認識している。

3-2 グロピウスの解釈と王の経験

上述を踏まえ、「中国的」という観念にかんするグロピウスと王の接点を再び見てみよう。グロピウスは高さを抑える建物あるいは重厚な傾斜屋根を「中国的」なものとして指摘したが、そのような認識を王の言説の中に見出すことはできない。その一方、中庭、廊、そして壁についてはグロピウスと同様に王の言説にも散見される。グロピウスが述べる個別の小さな中庭と壁は天井のことかもしれない。しかし、グロピウスは華東大学計画案において、独立する建物を渡り廊下で連結して方形の中庭を形成することによって、中庭を外部に開放し、伝統的な中国中庭とはまったく異なるものとしている。この構成はむしろ王が言説6で述べる院子に類似している。王は中国建築が「廊(走廊)あるいは比較的に広い中庭(院子)によって連結される。そうすると、一つの広い広場(廣場)、あるいはさらに一つの大きな建築のようになる」と述べていた。華東大学計画案では各棟がピロティの廊を介して広い中庭を囲み、それらがいくつも連続し周囲の庭園に開放されている。王の言葉で言えば、「内部と外部の融合」が図られている。これは王が語った園林のなかの廊に似た空間でもある。言説5を振り返ってみよう。「中国建築の中には、数多くの庭園(庭園)があり、廊(走廊)があり、柱もある」。グロピウスは壁と独立した小さな中庭を中国建築の特徴として認識していた。しかし、自身の計画案では閉じた院子を開放し、園林の廊を取り入れながら、より自由な平面構成を提案したのである。華東大学計画案は院子と園林の融合を示しているのである。

王も同様に、園林と廊による建物と庭園の開放的な融合に関心を示していた。しかしその一方で、蘇州住宅の閉鎖的な空間の体験からより強力な印象を受けていた。王は天井、進、後院など、閉じた空間が積層してあらわれる空間の奥行きあるいは奥深さに言及し、その神秘性、

浪漫性に魅了されている。また、備弄や界牆などの空間的な閉鎖性に恐怖を感じつつも、それらも「中国的」な空間として受け入れている。これはグロピウスの華東大学計画案には見られない特徴である。グロピウスが明示的な内外の連続を「中国的」なものとして解釈したのに対し、王は中国建築の閉鎖的な空間、あるいは閉鎖しながら連続する空間が醸し出すような暗示的な「含蓄」に「中国的」なものを読み取っていたのである。

おわりに

本稿では、王が指摘した「現代の中国的建築」に関心を向け、「中国的」という観念の内実を探索した。1章では「中国的」建築にかんする言説を概観した。グロピウスに宛てた手紙によると、「中国的」建築にたいする見解を王はグロピウスと共有していると考えていたこと、そしてその契機は華東大学計画案作成にあったことがわかった。そのうえで、さらに「中国的」建築にかんする王の言説を收拾した。それらはおもに中国住宅の一般的な見解と王の個人的体験であった。一般的な見解は園林あるいは四合院に関連し、個人的体験は幼少期に暮らした蘇州住宅にかんするものであった。

2章では王が暮らした蘇州住宅の類型を推察し、その構成を確認した。王が実際に暮らした蘇州住宅は明らかでないが、言説の内容から大型園林のない中宅であると推察した。また、描写された空間を理解するため、中宅の事例にもとづき、『营造法原』を参照しながら、中宅の空間構成を確認した。

3章では再び王の言説に立ち返り、「中国的」という観念の内実を吟味した。中国住宅の一般的な認識では内部と外部の融合、空間的連続性が中国的建築の特質とされていた。その一方で、王の個人的な経験から語られたのは天井、後院、備弄、界牆などの閉鎖的な空間、あるいはその連続による奥深さであり、そこでの神秘的、恐怖的、浪漫的な空間体験が中国的なものとして表明されていた。

こうした考察ののち、華東大学計画案に見られるグロピウスの見解と比較した。内部と外部の融合および空間的連続は二人の共通点であり、グロピウスは中庭と周囲の自然が捉えた特徴が開放的に連続する空間を計画していた。それに対し、蘇州住宅に影響を受けていた王は進や天井などの閉鎖性と空間の奥深さにもう一つの中国的なものも見出していた。それは華東大学計画案に見られない特徴である。

結論として、内部と外部の融合、および連続性、そしてまた閉鎖性を王は「中国的」なものと思っていたと言えるだろう。内と外、あるいは閉鎖と連続という対立するものが共立する関係こそ「中国的」なものと認識されていたのかもしれない。これらの関係はある種の二元論を成していて、その一方には神秘や浪漫性、他方にはシンプルという観念が結びついている。

本稿を通して把握されたこうした二元論が、王の作品においてどのように作用したか、それは今後の課題になる。

参考文献

- 参照した王大閔の著作（公刊物）は以下のとおり。基本的に原文はすべて中国語。本文中の引用文のうち、原文は丸括弧内で示す。
- 1) 蔡榮堂：王大閔の家、建築師雑誌、中華民國全國建築師工會、1977。
 - 2) 徐明松：王大閔-永恆の建築詩人、木馬文化、2007。
 - 3) 王大閔、李宗哲編：銀色の月球、通俗社、2008。

注

注 1) 台湾近代建築は第二次世界大戦を分水嶺として変化を遂げる。戦前は日本植民政府の營繕課が主導権を握ったのに対し、戦後は宗主国の建築様式が激減し、国際様式と中国の宮殿式が台頭した。また、戦後の建築士は台湾籍（主に日本教育を受けた専門者）、中国籍（国民党政権と共に台湾に來訪した専門者。欧米への留学経験を有する者も存在し、王はその一人である）、その他の国籍（布教活動と共に來訪した専門者。少数派）の3つに区分されるが、政府と社会文化の影響を受け、中国籍の建築士が主導権を握った。なかでも王のように欧米の留学経験を有する建築家は当時の閉鎖的な台湾社会において、モダニズムの代弁者として注目された。

注 2) 参考文献 2）、p. 15。

注 3) 参考文献 3）、p. 120。

注 4) 王は中国語で「中國的」と表記している。

注 5) 廖建彰：建築神話-戦後台灣現代中建築論述の形構（台灣大學修士論文、2001 年）あるいは張弘昌：戦後台灣的宮殿式建築主體性-以王大閎與李祖原的作品析論為例（台北科技大學修士論文、2008 年）が挙げられる。

注 6) 蔡榮堂：建築師雜誌、中華民國全國建築師工會、1977、pp. 36-41。

注 7) 蔣雅君：移植現代性、建築論述與設計實踐-王大閎與中國建築現代化的論戰、1950-70s、台灣大學建築城鄉研究所博士論文、2005 年。

注 8) 拙稿：台湾建築家王大閎の論考にみられる主題と構成の特性及びその変遷についての一考察、日本建築学会計画系論文集 78(693)、2013. 11、pp. 2399-2407。

注 9) 参考文献 3）、p. 35。

注 10) 1949 年中華人民共和国の建国以来、台湾に政権を移した中華民国政府は中国の唯一合法的政権とする主張の一環として、50 年代から多様な文化政策を公表した。

注 11) 東海大學王大閎研討會記錄、東海大學建築系、1997。

注 12) File no. 1691, Series III-Letters to and from Walter Gropius, Walter Gropius papers, Houghton Library, Harvard University.

注 13) グロピウスの計画案は国共内戦のため中断されたが、1955 年に I. M. ペイによって台湾で実現された。

注 14) 参考文献 3）、p. 56。

注 15) ed. by Walter Gropius: *The Architects Collaborative 1945-1965*, Teufen AR. 1966, p. 58.

注 16) *Interiors*, vol. 111, Whitney, 1952. 01, pp. 73.

注 17) Walter Gropius: Museum for Chinese art, Art, Shanghai, China, *Progressive Architecture*, Reinhold, 1948. 02, p. 52.

注 18) 拙稿、前掲論文。

注 19) 参考文献 1）、pp. 36-41。

注 20) 東海大學王大閎研討會記錄、東海大學建築系、1997。

注 21) 参考文献 1）、p. 37。

注 22) 同上、p. 37。

注 23) 同上、p. 38。

注 24) 同上、pp. 38-39。

注 25) 台湾建築家、修澤蘭（1925-）の作品であり、1966 年に竣工した。

注 26) 参考文献 2）、p. 15。

注 27) 同上、p. 25。

注 28) 鈴木充：中国蘇州市の住宅地形成の研究、住宅総合研究財団、1992、p. 6。

注 29) 蘇州住宅の分類に関しては次の文献を参照した。鈴木充：中国蘇州市の住宅地形成の研究、住宅総合研究財団、1992。徐民蘇編：蘇州民居、中國建築工業出版社、1991。陳從周：蘇州旧住宅參考圖集、同濟大學建築工程系建築研究室、1958。陳從周：蘇州舊住宅、上海三聯書店、2003。陳從周は蘇州建築研究の第一人者である。いずれも同様の分類をしているが、それは各調査が同済大学の協力によって行なわれたからであろう。小宅以外は三者の定義が多少異なるが、4 進以下は中宅、5 進以上、あるいは大型園林のあるものを大宅とする点は共通している。中宅は辺落がないと鈴木も徐も記しているが、徐は 2 落 4 進を中宅の例とした。また、陳從周も 2 落 3 進の中宅と定義している。落による中、大宅の分類はない。

注 30) 堂は母屋であり、兩脇にある対屋のことは廂と呼ばれる。1 堂 2 廂は中国住宅の基本形態と言われている。

注 31) 父親の王寵惠は中国同盟会以来の革命派人士であり、法学の大家として中国の国民政府の要職を委ねられた。

注 32) 中国住宅の構成にかんして、明清時代の中国の建築書として最も知られているのは『清工部工程作法則例』（1734）だが、その内容は主に宮殿の造営であり、中国北部の建築造営にかんする古典と言える。それに対し、中国南部の造営にかんする建築書は『工段營造録』と『營造法原』が挙げられる。李斗：工段營造録、1795（再版、中国营造学社、1931）。姚承祖、張志剛編：營造法原、建築工业出版社、1959。

注 33) 姚承祖、前掲書、p. 3。

注 34) 潘西谷編：中國建築史、六合出版社、1994、p. 209。

注 35) 鈴木充によれば、1 堂 2 廂のことを進と定義したが、徐民蘇は進が堂と天井により構成されるとしている。他の文献では、蘇州住宅では廂の奥行が浅い、あるいは廂が設けられないという説明もある（潘西谷：中國建築史、六合出版社、1994、p. 210）。『營造法原』には、廂についてとくに説明されておらず、本文中に挙げた例でもかならずしも 2 廂あると言えない。さらに遡って、蘇州を拠点として活躍した香山幫という匠人集団が代々重視した「魯班經」には、「庁屋の兩側に屋がさらに設けられると災禍が来る」という記述が見られる。また、蘇州園林に関する次のような記述もある。「室において、五つの柱或は兩側に廂を設けることが禁忌とする」（文鎮亨：長物志、1621。再版、王雲五編、商務印書館、1936）。したがって、本稿は蘇州住宅における進が主屋と天井により構成されると定義する。

注 36) 姚承祖、前掲書、p. 23。

注 37) 同上、pp. 64-65。

注 38) 同上、p. 22。

注 39) 同上、p. 32。

注 40) 陳從周：蘇州舊住宅、上海三聯書店、2003、pp. 19-20。

注 41) 中国住宅では母屋を堂と呼ぶのが一般的だが、蘇州住宅では庁とされることが多い。田中淡によれば、庁は機能により分類されるのに対し、堂や殿は形態によって分類される。漢代以降、主要なもしくは大きな建物を殿あるいは堂といい、屋内の大広間を庁もしくは堂と呼んだ（田中淡：中国建築史の研究、弘文堂、1989）。すなわち、堂は建物そのものを示す一方で、その内部の空間の一部分も意味し、建物自体は庁と呼ばない。また、『工段營造録』によれば、庁は殿と同じく、路寝（正寝と同様）のことである。一方、堂も正寝（主要建物）であり、庁と堂は同じものを意味している。『營造法原』によれば、内四界の前に二重の軒を設けるものを「庁」と言う。庁に対し、堂は一重の軒しか設けない。また、内四界の材料については、庁は角柱を使うのに対し、堂は丸太を使う。中国北部建築にかんする『清式營造則例』（梁思成著、中国营造学社、1934）では、庁の説明は見当たらない。おそらく庁は江南地域の用語と考えられる。したがって、本稿では『營造法原』にしたがって「庁」を用いる。

注 42) 姚承祖、前掲書、p. 13。また、鈴木の論文も参照した。（鈴木充：营造法原の研究（一）解題と台基、日本建築学会中国支部研究報告集第 15 卷、1989、p. 251。）

注 43) 姚承祖、前掲書、p. 35。

注 44) 梁思成：清式营造則例、中国营造学社、1934、p. 21-23。

注 45) 姚承祖、前掲書、p. 23。

注 46) 同上、p. 32。

注 47) 徐民蘇編：蘇州民居、中國建築工業出版社、1991、p. 61。

注 48) 園冶は「凡家宅住房、五間三間、循次第而造。惟園林書屋、一室半室、按時景為精」の記述がある。

注 49) 梁思成、前掲書、「辭解」p. 14。

注 50) 姚承祖、前掲書、p. 93。

注 51) 沈從周、前掲書、p. 21。

注 52) 参考文献 3）、p. 99。

図版出典

図 1： *Interiors*, vol. 111, Whitney, 1952. 01, pp. 68-69.

図 2： 同上、p. 78 をもとに作成。

図 3： 同上、p. 79。

図 4： 台湾国立国父記念館ホームページ（<http://www.yatsen.gov.tw>）。

図 5： 陳從周：蘇州旧住宅參考圖集、p. 84（小宅）、p. 96（中宅）、p. 128（大宅）に加筆。

図 6： 同上、p. 96 をもとに作成。

図 7： 姚承祖：營造法原、p. 34 に加筆。

図 8： 同上、図版 2 に加筆。

図 9： 同上、p. 153。

図 10： 梁思成：清式营造則例、p. 21 に加筆。

図 11： 姚承祖、前掲書、図版 4 に加筆。

図 12： 同上、図版 7 に加筆。

TAIWANESE ARCHITECT DA-HONG WANG'S IDEA OF “CHINESE”

Through discourses about Chinese residences

ShengChieh KO *, *Satoru KIMURA* ** and *Takahiro TAJI* ***

* Doctoral Course, Grad. Stud., Graduate School of Engineering, Kyoto University, M. Eng.

** Doctoral Course, Grad. Stud., Graduate School of Engineering, Kyoto University, M. Eng.

*** Assoc. Prof, Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.

Da-Hong Wang is a Taiwanese architect who is the leader of the modern architectural movement in Taiwan. The architectural philosophy of Wang shows an idea, which originates from Chinese culture. In the aspect of design, Wang's works also show a strong relationship with Chinese architecture, especially with Suzhou's residences that he had experienced with. This paper is focusing on the experiences of Chinese residences, which can be extracted from Wang's discourses and attempts to realize how these came to be, by understanding the structure of Suzhou's residences' space. Also, it will discuss the meaning of Wang's aforementioned experiences and intends to clarify Wang's idea of “Chinese” from the aspect of space. This paper contains the following three chapters:

Chapter 1: This chapter collects Wang's discourses, which relate to the keyword - “Chinese”, and provides an overview of them. According to the letter that Wang sent to W.Gropius, an understanding of “Chinese” was already established, and it was practiced by Hua-Tung Christian University in 1947. Contents of Wang's discourses can be classified into two categories. The first one is the general understandings that relate to Chinese garden (園林) and Siheyuan (四合院), the other is connected to Suzhou residences, where he spent his childhood.

Chapter 2: Suzhou's residences which Wang might have had experienced with are presumed throughout this chapter. Although it cannot be told exactly where, or which residences Wang had lived, the scope and scale can be reduced by his discourses. According to Wang, these residences might be a medium-scale Suzhou residence without a large-scale Chinese garden. Based on this result, and a manual of building residences in the south of China named 營造法原, the spatial structure of Suzhou residences can be confirmed.

Chapter 3: In this chapter, Wang's discourses are reviewed again, in order to clarify meanings of “Chinese” in the context. The features of “Chinese” are “combination of internal and external space” and “continuity of space”, which can be gathered from general understandings of Chinese architecture. However, by comparing with W.Gropius's project, it is interesting to note many other characteristics from Wang's personal experiences, such as 天井, 後院, 備弄, and 界牆. They indicate the closure of space, and the continuity of these closures shows a deepness of the residence's spaces. The deepness reveals a kind of mysterious, romantic example of space, which can also be considered a feature of “Chinese” that Wang has mentioned.

In conclusion, Wang's idea of “Chinese” can be characterized as “a combination of internal and external space”, “continuity of space” and “closure”. Internal and external, as well as continuity and closure, show the relationship of two opposed or contrasting aspects, referring to a concept of dualism. This concept connects to the senses of mystery and romance, as well as to the concept of simplicity, which Wang has mentioned. Therefore, clarifying how Wang practices the concept of dualism in his works will be the main subject of further research.

(2014年6月6日原稿受理, 2015年1月14日採用決定)